

協会ニュース ガイドに役立つお話 【野澤昭一】			
	2007年(平成19年)	8月号(123号)	曾呂利・極楽浄土われにたまわれ
	2008年(平成20年)	4月号(131号)	酒はくだらん
	2013年(平成25年)	8月号(195号)	悟りの窓・迷いの窓
	2016年(平成28年)	10月号(233号)	檀家に想う
	2020年(令和2年)	8月号(259号)	ハンカチ寺の家原寺
	2020年(令和2年)	4月号(275号)	心で聴く音の文化 水琴窟
	2021年(令和3年)	12月号(295号)	ご三筆と妙國寺
	2022年(令和5年)	1月号(296号)	伸庵でタイトル戦があった
	2024年(令和8年)	3月号(322号)	晶子の駿河屋、ルーツは鶴屋

極楽浄土われにたまわれ

[野澤 昭一]

昔、堺の目口町(甲斐町東あたり)に、和歌がうまくとっても、とんちの話の上手な人がおりました。もともと刀の鞘作り職人で、その細工がとてもうまく、刀は鞘にソロリと収まり、ソロリと抜かないと抜けないところから、ソロリの新左・曾呂利新左衛門と呼ばれるようになったと云われている。その新左衛門が太閤秀吉にいろいろと話をして聞かせるお伽衆の一人として御殿に勤めていた頃・・・太閤さんがエライ事を言い出した。



ある日の事、主だった家来を集めて「鎌倉幕府の執権北条時頼は、お坊さんの姿で国中を周り、いろいろと民の生活を垣間見て良い政治をしたという話じゃ。わしもそれを真似て一人で諸国を歩いてみたいと思うが皆の意見はどうじゃ」と言ったそう。それを聞いた家来達は仰天した。なにしろ太閤さんは一代で天下をとったお人。太閤に滅ぼされた殿様の家来とその子達が国中に沢山いて、仕返しの時を狙っているはず。なんとかしてこの話は止めないとエライ事になると、皆で止めたが太閤さんははなかなかに聞き入れてくれなかった。皆は困り果てていたが、2～3日後、病気でしばらく御殿へ上がっていなかった新左衛門が回復して出仕し、その話を聞き込んですぐに太閤さんにお目どうりした。家来達の反対でイライラしていた太閤さんは、曾呂利が来たと聞くとすぐに近くに呼んで「なんとも面白くない世の中じゃ。はて、なにか珍しい事はないものかのう」ピンときた新左衛門だが、いつもの調子でサラサラと話し始めた。「いやあ、この間の事です。チョットお願い事が在って、河内光の滝の不動さん(河内長野市滝畑の光滝寺)へお参りしました が聞いてた通りの大きな滝でした。ボンヤリ見てましたら突然滝の脇から、背丈二丈あまりもある大きな鬼が出てきよまして、私を引き裂いて食べようと手を伸ばしてきました。もうビックリしました。」「フンフン、そこで如何致した。」「下腹に力を入れて、鬼に言うたんです。『あんさんの強いのはよう判ってます。もう、あんさんの思い通りにするしか仕方ないが、私は生まれつき珍しいものを見るのが大好きな性分なんですわ。今鬼さんの恐ろしい姿見せてもろうたから、もう死んでもいいと思うてます。そやけど、鬼さんが小そうて可愛い姿になるのも見てみたいもんですねん。それを見た後やったらどうしてくれてもかまいません』と、申しました。太閤さんが一生懸命聞いているのを見て、曾呂利はんはちいと気をもましたんです。」「こらっ、その続きをはよ話さんか」太閤さんがイラ立つのを見ると、曾呂利はニッコリとして続けました。」「そう言った途端に鬼が消えよりました。よく見ると私の前で小さな梅干に成ってましたんや。そこで、私はその梅干をさっと掴んで口に入れると、バリバリと噛んで呑みこんでしもう たんです。これを聞いた家来達は、そんな馬鹿な事があるものかと大笑いでした。ところが、太閤さんはウンと考え込んで、『曾呂利め、たとえ話で上手にワシをいさめやがった。ワシの天下に対する力は鬼のように大きいが、一人で誰とも知れず世の中に出てはその力も生かせまい。曾呂利の話でよう分った。旅に出るのはやめよう』。と呟いたそう。これを知った家来達は「曾呂利どののとんちの良さは人に聞いてよく知っていたが、流石にみごとでござる」。と言い、褒め称えたそうや。ところで、この曾呂利はんが重い病気にかかって、もう寿命が幾ばくも無い時に、太閤さんが大そう気に懸けて使いの者を見舞いに行かせた。」「太閤殿下が、何でも望みが有れば叶えて やると仰せだが、何かご所望は御座らぬか」と、使いの者が言うと、曾呂利はんはしんどうてたまらんのに、手を合わせて和歌を詠みだした。

御威勢で三千世界手に入らば、極楽浄土われにたまわれと詠んだそう。太閤の大きな力で、どこの土地でも手に入るのであれば極楽を下さいと頼んだと云う。そのうえで・・・「片道の旅やから、返事は持ってこられまへんが、それで良かったら、あの世への御用を聞いときまっさ」太閤さんはそれを聞いて、「死ぬ時まで面白いやつや」と、言って涙を流したと云う事です。天下人に涙を流させた人物、堺が生んだ偉大な先達に思いを馳せて屋敷跡で合掌。 <日本の民話より>

酒はくだらん

[野澤 昭一]

酒といふ文字を見るさへうれしきに のめという人神か仏か(作者不詳) 辛党の人からパッシングを受けそうな表題ですが、その昔、上方〔大阪〕から江戸へ行く事を『くだる』と云っていました。当時、上方〔主に伊丹、灘〕の酒が江戸に下がってくる事を、くだり酒と呼びました。その下り酒は江戸の人々に絶大な人気があり「下り酒は素晴らしい。下り酒でない酒はくだらん」と言ったとか。それがくだらんの語源になったと云われています。文化文政の頃の江戸時代の人口は約 100 万人。上方からの下り酒は、4 斗樽(72ℓ=1 升瓶 40 本)年間約 12 万樽下った記録があります。優に、一人が念に一樽強空けた計算になります。また、大きな酒屋、居酒屋が 200 軒以上も在り大酒呑み会(今流、お酒愛好会)の記録によると、酒之上久唾巻(さけのうえのくだまき)・二三升平気助(にさんしょうへいきのすけ)・酔之進等のユニークなニックネームをつけて、酒豪ならぬ下り酒を愛飲したそうです。今日のご時勢、これくらいのゆとりとユーモアのある酒愛好会を当協会に発足させても良いのでは、と思ったりします。



- ① 下り酒隆盛の話 関ヶ原の戦いの年、摂津伊丹の鴻池新右衛門が四斗樽二個を馬に積んで江戸へ下った。この酒が江戸で大評判になった。当時の江戸は、町の建設での肉体労働者と荒々しい武士が多く居て、新開地であった。江戸っ子は意気でいさせて「ググイツ」と飲める辛口の下り酒の味を愛し、それが良く似合ったといひます。その後、酒の運搬手段が海運になり樽廻船で大量に運べたので、新酒が下る頃江戸の町は大活況でした。多い時、15 艘もの樽廻船が就航したそうです。一斉にスタートして通常は 10～15 日かかった西宮～江戸間を 5 日で完走したといひます。江戸の酒問屋はこの酒を深川の料亭に送込み、その年の利き酒をして、値段を決めました。現代版ボジョレヌーボーです。まず、最初に将軍に献上し、年間の天下安泰を祈願しました。なぜ下り酒でないとダメなのか江戸の人は下り酒の味が好き。地回りの酒(地元の酒)は甘口で口に合わなかったし、と地元で辛口の酒が造れなかった。
- ② 日本酒の始まりは、お神酒(おみき)が最初の酒と云われています。(諸説有るそうです)注-1 平安時代の天皇が飲んだ酒。アルコール度が低く、猛烈に甘い(表 1 参照)その後、甘くなくもっと酔える酒の出現が望まれて、酒造りは少しずつ進化していった。注-2 室町時代の天下の名酒天野酒。アルコール度は良いが、まだ甘い。(表 1 参照)江戸時代、他を圧倒した下り酒も、その前半はまだ甘かったそうです。注-3 江戸中期頃まで最大の産地であった伊丹酒丹讓(たんじょう)は、将軍の御ぜん酒に指定された名酒。レシピを元に酒永代仕込帳(1689～1722)の中から、元禄 15 年(1700)の冬仕込みの酒を他酒と比較したのが下表です。(表 1 参照)

表-1

品名	アルコール度	糖分	備考
平安時代の天皇が飲んだ酒	3.0%	34.0%	なかなか酔えず猛烈に甘い
室町時代天下の名酒 天野酒	15.7%	15.0%	アルコール度は現在と同じ まだ甘い
伊丹酒丹讓	18.2%	7.4%	天野酒の半分の糖分 まだ甘い
灘の生一本	19.0%	2.7%	淡麗辛口 今の酒と同じ

悟りの窓・迷いの窓

[野澤 昭一]

過日、山口家住宅の配置の時に、お客さんから「窓の形には、意味があるんですよね。」と質問された。

聞いた事はあったが、はっきり判らずに、「そうですね。」と曖昧な返事で返したものでした。

先日、京都大徳寺塔頭の聚光院にて行われた三好長慶の法要に参拝した折、足を延ばして洛北の源光庵に

参拝してきました。山麓と云うか、かなり高い位置にある静閑な所にあるお寺で、お客さんもマバラでしたが、

念願かなってゆっくりと見学できました。30 分ほど悟りの窓の前で座禅の真似をしたが、何も得られず煩惱だけが駆け巡る空間のようでした。写真は本堂内（源光庵パンフより）

左の丸窓が悟りの窓。「禅と円通」の心を表わし、円は大宇宙を表現する。

右の角窓が迷いの窓。「人間の生涯」を象徴し、生老病死の四苦八苦を表わしている。



悟りの窓



迷いの窓

山口家住宅の円窓(今はスダレで見づらい)、角窓(二重枳の手水鉢を借景)・本源院の角窓等があります。

定点やガイドで、必要な時があれば使いたいと願っています。

後日、これらの窓の形は、全ての窓に当てはまるのかとの質問もいただきましたので、源光庵のご住職にお聞きしましたところ、「仏教の教えを取り入れたものだから、仏教関係の建物はそれで間違いない。ただし、茶席等の直接仏教と関係ない建物は、そこで聞き確認した方がよいでしょう」との、お返事をいただきました。一言、書き添えさせていただきます。

2016 年(平成 28 年)10 月号(233 号)

檀家に想う

[野澤昭一]

檀家制度は、仏教が日本に伝来した時から発生したものという貧しい知識から、私は長い間そうなのかなと思っていました。しかし、間違っていました。今頃そんな事を言っても、有識の皆さまの前で恥しい限りです。最近機会があって、檀家制度の知識を得ることが出来ましたのでお話をさせていただきます。

江戸時代初期、徳川家康によって寺院法度が布達されたのが始まりとされる。全国の寺院を政治的・経済的に規制して、中世寺院が持っていた特権を剥奪することによって、僧侶を教学に専念させる一方で、寺院の行動を幕府権力の統制下に置くこと。



- 1 平和が来て、僧侶は、士農工商に象徴される階級固定の幕政に従って差別支配に組み込まれた。さらに各宗派本山に地方寺院が吸収され、寺にも僧にも階級が生まれた。
- 2 僧侶には、幕府の心・公卿の心をおのれの心として、民衆育成をはじめとする様々な役割が課せられた。その見返りとして寺と僧には給料としての土地が、五十石・百石・千石といった様々なランクで与えられた。
- 3 こうして江戸時代の僧侶は、まさに武士の政府、つまり幕藩の公務員として生きることになった。僧侶は宗派毎に厳密に本寺・末寺関係でしばられ、上下の関係は、士農工商の世界と同じように厳しかった。
- 4 一方で江戸時代の民衆のすべては、いずれかの寺の檀家となることが強制された。それによって、キリシタンをはじめとする当時の危険思想の持ち主でない事を、檀家寺の僧侶から証明をもらわなければならなかった。
- 5 江戸時代の僧侶が依存した檀家制度こそ、幕藩が僧侶に贈った最大のプレゼントであった。幕藩体制が崩壊し去った近代・現代に於いても檀家制度が仏教寺院で生きているのがその名残であり、現状である。
- 6 幕藩の公務員として僧侶が果たした大きな役割が三つある。

その1・・・村役人の仕事の肩代わり 2・・・思想善導役 3・・・特高警察の役割

○僧侶は檀家の人々の冠婚葬祭の証明書と旅行手形発行の権限を握っていた。さらに檀家や民衆に説く説法の中に特権的に公卿の心を取り入れ、幕藩の期待する民衆を育てあげることに協力した。その為に仏教の教えの中に、大幅に権力の要求する儒教の思想が盛り込まれた。

○江戸時代の為政者が、危険思想のレッテルをはって、その圧殺に努力した隠れキリシタン・不受布施派（隠れ題目）・隠れ念仏などの地下信仰の摘発の処断に、僧侶は特高警察的役割を演じた。その際利用されたのが、檀家に対する宗旨人別帳で、それは民衆に対する大きな圧力と睨みになった。宗旨人別改めの権限を僧侶が握っている限り、民衆は例外なくいずれかの寺院の檀家にならざるを得なかった。

○幕藩の公務員としての地位により、幕藩体制が続く限り僧侶の生活は安泰そのものに見えた。

○しかし、幕藩体制を双肩になっている武士でさえ、江戸時代の中頃になると、その俸禄だけで体面を維持することは難しくなり、武士、なかでも下級武士のアルバイトが生まれてきた。まして幕藩体制を側面支える僧侶が、手もと不如意を幕府から護ってもらう事は出来なかった。その為、僧侶のアルバイトが必要になった。僧侶は喰うために檀家の面倒を見始めるのである。

○戦国時代までの僧侶は、一般民衆の墓や葬儀などに関係することは少なかった。そうした仕事は一ランク低い勧進聖(かんじんひじり)たちが、村々を廻って行うのが常識であつた。江戸時代になると僧侶は、一般民衆の葬式と墓守の仕事を勧進聖から奪い取って、副収入の財源とした。

○これで僧侶は一息ついたかにみえたが、江戸時代 260 余年の間に成された生活の向上は、さらに数々のアルバイトを僧侶に余儀なくさせた。

○人間一度しか死なない。葬式は一人一度だけである。これを何回にも活用し、死者を媒介として収益をあげる為に考えついたのが、死者、つまり民衆の祖先の法要の回数の増加であった。その為に生まれたのが檀家の人々の過去帳の作成であった。

僧侶は過去帳によって、檀家に対して、3 回忌・7 回忌・13 回忌の法要を次々に要請し、その度毎に出されるお布施が僧侶の生活を支えた。

こうして江戸時代の仏教は、生者の為より死者のため、つまり完全な葬式仏教化への道を急速に歩んでいった。記のような仔細を知り得ました。その知識は知識として知りうるのみと認識しております。

合掌※日本仏教史(笠原一男著より)

ハンカチ寺の家原寺

【野澤 昭一】



家原寺は知恵の文珠さんとか、落書き寺とか言われて親しまれています。戦後は真言宗に包括され、高野山真言宗別格本山とされてきましたが、2018年に包括から離れて、行基宗を標榜する寺院として生まれ変わりました。行基が生家跡に小庵を建て、父親の菩提を弔ったのが家原寺の始まりとされているのは皆様ご存じと思いますが、その他、家原寺住職のお話を2件ほどご紹介します。

〔その1〕ハンカチ寺・落書き寺として 太平洋戦争の後、本堂の外板壁いっぱいにチョークで合格祈願を書いたのが始まりである。昭和55年(1980)当時の住職が落書きを禁止して、ハンカチに合格祈願を書き、それを外壁にピン止めする様に改めた。これは、合格祈願以外の事を書くことを禁止する為と、本堂外壁の劣化防止を考慮した為である。その時に考え抜いた案が、ハンカチ(半勝ち)である。即ちハンカチで合格の半分を勝ち取り、残りの半分を実力で勝ち取る。これで合格間違いなし、と定めた。

〔その2〕南大門の仁王像現在在る仁王像は、土塔の大野寺から持って来たものである。それ以前に家原寺に在った仁王像はアメリカワシントン郊外にあるフリーヤ博物館に今も陳列されている。大正初年に売ってしまったもので、売買契約書に買った人の名前が残っている。上記は、昭和61年堺の四季新春号の対談を引用したものであるが、この時の家原寺住職が寺西龍愿(りゅうげん)師で、今より3代前の住職である。生まれ・・・明治38年(1905)昭和11年(1936)、31歳で家原寺住職になる 昭和61年(1986)、81歳、現役時代の対談。



天平の3文珠食わずに参るは家原の文珠・食べて参るは安倍の文珠・眺めて参るは切戸の文珠。ご飯を食べずにお参りしたら、家原の文珠はご利益があると云う言い伝えがある。

参考文献：堺の四季 昭和61年新春号

心で聴く音の文化 水琴窟

江戸時代文化文政の華の頃、当時の庭師によって考案された水琴窟は、日本庭園最高の技法の一つとされ、「つくばい」の鉢前につくられたもので「洞水門」とも言われている。

水琴窟は音の文化の代表的な一つであり、一つの余韻を追って耳は限りない静寂に出会う。それは自然と出会い、そして五感と出会う。待ちわびる音色は、無への世界へと入り込む。この単純にして微妙なる音色一つを求め、静の中に動を求めて己をば無我の境地へと引き入れてくれるものが水琴窟であろう。

風のささやき語る中に玄妙な音色を楽しみ、現世の音の氾濫を逃れて、音の原点を静寂の中に求めて懐かしむ。

【単純にして絶妙の音色】・音の文化の象徴であろう。

日本庭園の基調として

- ① 見え隠れ
- ② わび・さび・渋さ
- ③ 省略とゆとり
- ④ 余情と余韻

水琴窟はこのすべてを表現している。

1. その姿はすべて土の中に隠されている（見え隠れ）
2. つくばいの石組や形も派手さは何一つなく、
待ちわびて聴く小さな音色、造る者のゆとりと
遊びの心が表されている。（わび・さび・渋さ）
3. この音色は、心で聴く音色である。（省略とゆとり）
4. 流れ出た水の音よりも、水滴と水滴の間を聴き余韻を楽しむ（余情と余韻）



（奈良当麻寺資料より）

南宗寺の名勝日本庭園を眺めて心を洗い清めた後に聴く、澄んだ音色・幻の音色をお客様に堪能していただくようにご案内するのも素晴らしい事ではないでしょうか。



ご三筆と妙國寺

【野澤 昭一】

突然ですが、私たちが観ボラ配置に入っている妙國寺の資料室に、嵯峨天皇の書なるものが木箱で展示されています。残念ながら開封はできません。何故ならば、この貴重品が開封時に破損でもすれば取り返しのつかない事になるからダメとのことで、中身は見ることはできません。(見たいのですが、念のため)ご三筆とは嵯峨天皇・空海・橘逸勢(たちばなのはやなり)のことです。平安時代初期の能筆家であり「日本の書道史上の最も優れた 3 人の並称を云う」と、物の本に書いてあります。さて、その他の二人は・・・空海(弘法大師)と橘逸勢ですが、二人とも 804 年(延暦 23 年)に 18 代遣唐使として入唐しています。空海は一留学僧の身分で、20 年間修業予定の渡海でしたが、日本で厳しい修行をしていたので、わずか 2 年で唐長安で最高の僧位大阿闍梨を修得しました。

空海達が入唐してからちょうど 2 年後の大同元年(806 年)に、「高階(たかしな)野(の)真人(まひと)遠成(とおなり)」大使の遣唐使船が入り、その船で空海と橘逸勢は帰国する事になりました。大使が時の皇帝 14 代憲宗に拝謁する時に随行した空海に対して、憲宗皇帝から宮殿内の別室の空間白壁に書を頼まれました。

空海は最初の白壁に、五本の筆の中から一本を選び詩を書いた。

力拔山兮氣蓋世 (力は山を抜き氣は世を蓋う)

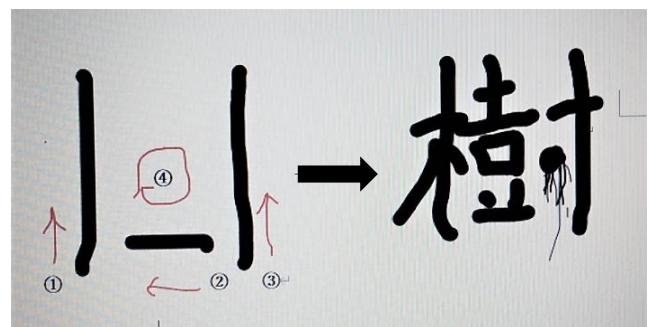
時不利兮騷不遜 (時利あらず騷逝かず)・・・楚の項羽が自分の死を覚悟して作った詩。

隣の壁には王羲之の書で、魏の曹操の詩が書かれていたので、敢えて項羽の詩を書いたと云う。

そして残ったもう一つの白壁に向かい、今使っていた筆と、余っていた 4 本の筆を右手で一つに握り、たっぷりと墨を含ませてから、

- ① 白壁の左下端から、真上に太い一本の大きい線を引いた。文字とは言えぬ。
- ② 下端の中ほどに、右から左へ一本の太い線を引いた。
- ③ 下端の右下から、真上に太い一本の大きい線を引いた。
- ④ 真ん中に、太く短い線を何本か引いていく。(図では空白の所)
- ⑤ 最後に、左手に筆を取り、右手で硯を持って墨の全てをざぶりと壁に向かって勢いよく注ぎかけた。

点から墨が流れ落ちてきたが、細く長くて、得も言われぬ風情が出来た。樹の一字が力強く壁いっぱい、見事なまでに書き上がったと云う。金文でも草書でもない・・・隸書でもない・・・篆書でもない。しかし樹の文字であった。曹植の詩「高樹」を書いたのである。高樹多非風(高い巨大なる樹には非風が多く吹く)・・・曹操の子、曹植は卓越した詩人。これを見て感激した憲宗皇帝が、空海に向かい、「今日から五筆和上(ごひつわじょう)を名乗るがよい」とご下名を賜った。弘法大師空海=五筆和上(日本ではあまり知られていない)の誕生。



逸話

①空海は大同元年(806 年)に帰国したが、なんと次の遣唐使船は 32 年後の承和 5 年(838 年)であった。空海は承和 2 年(835 年)3 月 21 日没で、大同元年に帰国していなければ、かの地で亡くなり弘法大師

空海と真言宗は成立しなかった。

②僧円珍(智証大師)が入唐して長安に入った。この円珍が青龍寺を訪れたおり、恵灌という僧が、「五筆和上はご健勝でしょうか」と問うた。「五筆和上は先年亡くなられました」と、円珍が答えると、恵灌はハラハラと涙を流したと云う。

③嵯峨天皇(52代)が弘仁14年(823年)に、弘法大師空海へ東寺を賜る。

④橘逸勢は語学力が不得意で書に傾倒したため、帰国後書家として大成した。

⑤空海が修行した長安の青龍寺(現中国の西安)は、四国八十八か所のゼロ番札所に指定された。四国4県が中国西安市にお願いして認可され、日本から多数の参拝者が観られる。(ご朱印頂ける)皆さま妙國寺でガイドされる時があれば、嵯峨天皇の資料の前でご三筆のお話を少し交えていただければ有難く思います。

参考文献 弘法大師傳全集内の高野大師御広伝(高野山大学図書室) 長谷實秀著 六大新報社
弘法大師伝承と史実 武内孝善著 朱鷺書房 今昔物語集震旦編 国東文麿著 講談社
沙門空海巻ノ2 夢枕獏著 KADOKAWA

2022年1月号(296号)

伸庵でタイトル戦があった

【野澤 昭一】

「伸庵でタイトル戦があったのを知ってる？」と、新しい会員の何人かの人に聞いても、大方の人は知らないとの返事でした。

私たちは資料を持ち知っていて当たり前ですが、後の人々に伝わってなければ知らなくても当然かと思えますし、少し後ろめたい気もします。



第一回開催 堺市茶室伸庵 平成9年(1997)4月10日
11日 名人戦第一局。羽生善治(当時名人)対谷川浩司(当時竜王)でタイトル戦が開催されました。結果は谷川さんが99手で勝ち、以後は東京・愛知・長崎・北海道・群馬と転戦して4対2で谷川さんが勝ち、通算5期の名人位で永世名人になり、そのさきがけが伸庵の勝利でした。このタイトル戦開催は、堺出身坂田三吉を偲ぶ坂田三吉杯将棋大会第10回開催の記念行事として開催されたものでした。堺で初めてのタイトル戦であり、とても盛況だったと聞いています。

第二回開催 堺市茶室伸庵 平成20年(2008)4月22日23日 名人戦第2局森内名人(当時)対羽生善治の第2局。森内名人勝ち。以降4対で羽生さん名人になる。昨今、若年の藤井竜王が大活躍して将棋界が盛況で話題も豊富です。

堺も古墳群が世界遺産となり周辺が観光で賑やかです。近くに茶室伸庵・黄梅庵がありますが、お茶のお茶話と共に将棋のタイトル戦も交えたら如何でしょうか。(関西将棋連盟・日本将棋連盟)

晶子の駿河屋、ルーツは鶴屋

【野澤 昭一】

室町時代中期(1461 寛正 2 年)山城国伏見九郷の里網戸の庄(京都市伏見区)に、初代岡本善右衛門が「鶴屋」の屋号で饅頭処を開いた。後の駿河屋である。

5 代目岡本善右衛門が 1589 年(天正 17 年)に練羊羹を作り、豊臣秀吉に献上し、秀吉が聚楽第で開いた大茶会でこれを引き出物として配り、諸大名の賞賛を受けた。その 5 代目の時期に京町に移り、伏見桃山城正門前に店を構えた。紀州徳川家の祖、徳川頼宣(よりのぶ)公が幼年時代、山城伏見(伏見区)に居た頃にそのお菓子を食べて大そう好んだ。頼宣公が 1609 年(慶長 14 年)に駿府へ



転封した時に御用菓子司として鶴屋は随伴した。(お殿様献上お菓子屋で箔がついた。今の公務員待遇にあたる)随伴した五代目善右衛門は、創業地伏見を弟の善一に任せた。本来は枝分かれした分家筋にあたることも解釈できるが、御用商と一般商の格の違いから駿河も総本家鶴屋の屋号を用いた(和歌山市立博物館学芸員)。さらに 1619 年(元和 5 年)紀州に転封した時も随伴した。その時に和歌山城下駿河町に屋敷を賜って、同地に店舗を構え総本家鶴屋として開業した。(紀伊国名所図会で和歌山を若山と呼ぶ時があるが、若山の方が古くから使われていて万葉集に出てくる。いっぽう和歌山は、和歌の浦から取った当て字で若山より新しい。どちらを称しても間違いではない。和歌山歴史館学芸員)

○紀州鶴屋→紀州駿河屋に屋号変更 1685 年紀州徳川家に五代將軍綱吉の娘・鶴姫が奥入れしたことから、その御名に憚(はばか)かるとの藩命が下り、1685 年(貞享 2 年)4 月に鶴屋改め駿河屋とした。紀州藩 3 代綱教(つなのり)公が命名した。

○京都伏見の総本家駿河屋

紀州鶴屋が駿河屋に屋号変更した当時の伏見側の資料が現存せず確認する事ができない。前後の資料から判断して、この時期から総本家伏見鶴屋も、鶴屋から駿河屋に屋号変更している可能性が高く、そう判断して良い(和歌山市立博物館学芸員)現在は京都伏見総本家駿河屋と、和歌山総本家駿河屋がその流れから現存しているがルーツは同じである。

○大阪駿河屋

1811 年(文化 8 年)に、13 代時に次男岡本善三郎が伏見総本家駿河屋から分家し、大阪淡路町 1 丁目(大阪中央区)に大阪駿河屋を開店した。

○堺駿河屋とその後

大阪駿河屋に勤めた初代鳳惣助が認められ暖簾分けし、大阪心斎橋に店を開いた。長男の鳳惣七(晶子の父)が後を継いだ。次男善六が堺甲斐町に店をもったが店を辞めるために、長男の鳳惣七が心斎橋店を閉めて堺店を継いだ。晶子の父親は明治 36 年 9 月、56 歳の時脳溢血で突然の死。晶子 25 歳の時だった。兄秀太郎の意向で葬儀に出る事が叶わず、夫の鉄幹は家に入ることを許されなかった。

惣助(初代)⇒宗七(2 代)⇒宗七(3 代・弟の篤三郎)⇒久夫(4 代)で堺駿河屋閉店(久夫は晶子の甥にあたる)太平洋戦争空襲で昭和 20 年 7 月に店舗全焼し移転した。昭和 54 年に堺市中瓦町 2 丁 1 番地、堺市役所北門前の通りにあった堺駿河屋は閉店した。(大阪春秋 16 号、与謝野晶子明治編逸見久美著)

(参考資料)大阪春秋 16 号・与謝野晶子明治編逸見久美・紀伊国名所図会・和歌山歴史館・和歌山市立博物館